
英雄の息子と魔神殺しの英雄と

久留井 耕貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の息子と魔神殺しの英雄と

【Nコード】

N3345U

【作者名】

久留井 耕貴

【あらすじ】

ヨコ魔に感化されて書き始めました。正直、主人公マンセーな部分が作者には強くあり、主人公最強ものに近いですから注意してください。

この作品はGSの横島がネギまの世界に行くと言うものです。

アンチは基本無いつもりかな？

残酷な描写有りは一応です。

後、ネギまは売ってしまったので、ストーリーに矛盾やキャラの口調が違う！ と言う批判はあるでしょう。ストーリーはオリジナ

ルを入れるつもりなので見逃して欲しいですが、口調は随時訂正したいです。

ただ、大目に見て貰いたいかも……。

プロローグ（前書き）

こんなのは横島じゃない！　という人が居るかもしれません。
横島強過ぎ！　と言う人が居るかもしれません。
しかし、言わないでください。

作者はガラスの様に貧弱なハートの持ち主です。

ただ、書き方の改善点はお願いします。

できれば、なのはとのクロスも書いてみたいです……。

プロローグ

剣が闇夜の中に煌めいた。

月光を受けた刀身の白き輝き、長さ百六十センチのそれは武器としては大太刀に部類されるが、それでも十二分に規格外の長さだ。重さは三キロは優に超えるだろう。気の運用を前提に造られた代物である。

本来一人では抜けそうにもないそれを、しかし関西呪術教会の長であり最強クラスの使い手である近衛詠春は、そのような常識は知らぬとばかりに抜刀して襲いかかっていた。

その太刀捌きの速き事光の如く、最初は不埒な侵入者に制裁をと意気込んでいた巫女姿の女達は、詠春の自分たちの長の力量に目を奪われ陶酔し畏怖を表し、忠誠を新たにしている。

それほどまでに詠春の太刀は過激で猛烈でさながら闘牛いや、濁流の様な勢いと存在感が在った。

日本建築の髄を集めて建設された関西呪術教会の本拠地。今では失われた技法も使われるそこは、しかし今だけは月光のスポットライトを浴びる劇場となっていた。

詠春の苛烈な猛攻。斬撃が一瞬に十は煌めき、辺りの悉くを粉塵と為す。神鳴流の奥義は既に人知を超えた現象を引き起こし、襲撃者に襲いかかる。

まさに最強クラスと言って過言では無い力量だ。

しかし、相手もまた最強クラスに身を置いていた。

一見普通の高校生にしか見えない青年。赤いバンダナがトレードマークの彼は、右に籠手を左にサイキックソーサーと呼称する六角形の盾を構えていた。

一見一般人と見間違えても可笑しくない彼はしかし、詠春の攻撃を紙一重で避けていた。

この事実気づく者はただ一人、敵対している近衛詠春のみだろう。この若さでこれほどの高み……気が昂ぶるのを自覚していた。それだけでも称賛すべきなのに、この青年は反撃まで行っているのだから、詠春は既に感銘と言った気分さえ持っていた。

攻撃方法は解らないが、剣のように鋭い何かで自身が切り裂かれているのだ。勿論詠春も歴戦の感が、最初に服を斬られた以外は避けているが、それでも十分に驚きだ。

何故かは知らないが、基本的に右手に順ずるような斬撃は、躲し易かったが得体の知れない攻撃はそれだけでも恐怖だ。

並みの使い手なら何をされたか解らぬまま血の海に沈んでるだろう。詠春も久しぶりの鍛錬の後で気が昂って無ければ危なかったかもしれない。

二人の戦いは、観客の居た場所から離れた山の中へと移っていた。詠春にしたら、戦闘員としては足手まといの巫女達から離す為に横島からしたら、美女達、美少女達を傷つけないためだ。

しかし、横島には愚策であった。

何故なら、詠春が周りを気遣って使用してこなかった奥義を使用可能にしたのだから。

「斬空閃!!」

剛悍なる気迫籠った叫び。

振りぬかれた刃は宙を奔り鮮血に染まった。

凡そ五メートルほどの距離、回避のため後ろに跳んでいた横島には回避する事は出来ずに、寸での所で身を捻り、サイキックソーサー

で受け流すも肩を斬られたのだ。

「痛い！！　おいコラ、オッサン！！　覗き位で刃物振り回すなよ。つてか、あんなに巫女さん侍らしゃがつて！　富の偏在が俺の様な存在を生み出すんだよチクシヨーーーー！！！」

横島がこの世界に来た第一声は何とも情けないモノだった。追撃をしかけようとしていた詠春も堪らず足を滑らせる。

「隙有じゃああああ！！　女の敵メエエエ！！！」

「ツツ！！！」

そうだ。

元々の横島の戦い方は、自分のペースに嵌めると言うモノだ。何故今になってこの様な叫びを上げたのかと言うと、巫女さん達の存在が大きい。

勿論かつこ良い所を見せたいと言う下心が在った事は言うまでもないが、横島は何時でも巫女さん達を護れるようにしていたのだ

これは、猿神と小竜姫に教えられたことで、正直横島の戦い方は護るのに適していない。

今までは美神が居たが、これから横島も独立したり、弟子を取るだろう。

その時のために正道の基本的な技術を上げていたのだ。勿論、文殊と言う者もいるだろう。しかし、あれは酷く消耗が激しい。

「キミは随分と面白い人物の様だね。正直、キミを知らなかった自

分が嫌になるよ……。キミほどの人物を知らなかったのだから」

詠春は、先程の事が原因で幾らか気が抜けたようだ。勿論警戒は怠っていないが、この人物と話してみたくなっていた。

それは、彼のどこか憎めない雰囲気も理由に挙げられるのかも知れない。

しかし実際、詠春と互角に打ち合える人物は世界的に有名で在っても全然可笑しくは無い。

何せ彼はサムライマスターなのだ。幾ら衰えたと言えど、それでも鍛錬を続けている詠春の今の力量は魔法世界における格付けで「S」は在るだろう。

Sとも成れば、それこそ魔法世界・旧世界問わず名が広まっても可笑しくは無い。

にも拘らず知らない事に詠春は府抜けたかな？ と溜息を漏らした。

元はと言えば、関西呪術教会が内部抗争の足の引っ張り合いのせいだ。と不満が湧きあがる。

「何言っただ？ 俺程って……俺みたいなやつなんてそこら中ゴロゴロ居んだろ。それよりも、此処は何処なんだ？ 龍脈の近くに在るってことはそれなりに重要な場所なんだろ？ 美神さんに見せて貰った場所に無いんだけど」

横島は、老師達に戦闘訓練をつけて貰うと同時に、GSとしての知識も会得していた。

それは美神始め西条やピートが教えてくれたからであり、愛？の鞭の賜物だ。

実際、彼らには及ばないまでも基礎的な知識は覚えている。

その中でも龍脈は重要な部分であり、霊が早く霊力を増したり色々危険なので、場所と景色を共に覚えさせられたのだ。

「……キミも冗談が上手だね……それに、龍脈を視る事が出来るのか……興味深いよ」

「オッサンに興味持たれてもうれしくないっちゅうに……さっきの巫女さん達の方なら大歓迎だな！」

こうしている間にも横島は策を練っている。

此処は詠春のホームだ。唯でさえ横島は長期戦に弱いのに、相手の増援が来る可能性の高いこの場所で戦うのは得策ではない。

しかし、詠春が横島に文殊を使う時間を無くしているのも確かだ。今横島は文殊の《転移》は使えない。それは、半端な集中でやれば何処に出るか解らないからだ。もし、地中などに出ればそれ即ち死を意味する。

だからと言って、サイキック猫だましや文殊の《閃》を使うには一旦武装解除しなければいけない。

降服を装った所で果たして通用するか……。

このままでは、結局膠着状態が続く。

それならば、降伏して心象を良くした方が良いと、横島はこれ以上痛いのは嫌だしな……との本音に基づく合理的な決断を下した。

これが後に人外との懸け橋と呼ばれる横島が、関西呪術教会に所属する切片だった。

触れ合う軌跡（前書き）

エヴァとの戦闘に入るまでは展開が大分早いです。
もし、もっとゆっくりと思われる方が居たら、修正します。
だけど、早く原作キャラとの絡みが書きたい！！

触れ合う軌跡

横島忠夫は純粹だ。

それは、あの大戦を経験した後でも変わっていない。
勿論、変わった所もあるだろう。苦しかった筈だ。悲しかった筈だ。自分の手で選択するのはきつい筈だ。

それは横島にしか理解できない事だし、他人は幾ら横島の近くに居てもそれを感じる事は微塵たりともあり得ない。

しかし、思う事は出来るだろう。

彼のあの日の痛哭こうくにはそれ程までに、痛々しく、悲しかった。

だから、彼は今日もナンパする。

それは彼が横島忠夫なのだから。

「良く瞳が綺麗って言われませんか？」

「アハハ。馬鹿みたい」

そう。例え、それは滂沱の涙を流す事になろうとも。

「君のためなら何だってしてあげる！」

「消えて。今すぐ」

青春一直線に夕日目掛けて走ろうとも。

「一発~~~~!!」

「死ね！ 下郎!!」

真帆良学園の教師として着任するその日であろうと変わる事は無い。

横島忠夫を案内役兼見定め役として迎えに来ていた教師タカミチ・T・高畑はそんな光景に目を疑った。

これが、あの堅物近衛詠春の懐刀と呼ばれる横島忠夫なのか？と。

「いやあ、お見苦しい所を見せたっすね」

横島も、この二年で成長したのか恥ずかしそうに頭を掻きながらタカミチの横を歩いていた。

しかしそれでもナンパを止めないのは横島の横島たる所だろう。タカミチも、多少驚いたものの紅き翼と言う或る意味それ以上に濃いメンバーと付き合っていたのだ。

対応するのは早かった。

「いや、人数には驚いたけど節度は守っていたようだね。無理矢理とかがあれば広域指導員として注意しなければいけないけど、あの範疇なら苦情が来ない限り行動を制限できるものでは無いよ」

そう言つて、明日菜ならば苦味のある笑顔が良い！！と叫ぶだろう苦笑をする。

実際、五十人を超えた辺りからは有名になったからか声を掛けられた女性もどこか楽しんでいる節が在った。

タカミチとしては、百人切りには驚いたが、笑って済ませれると判断したのだろう。

勿論、立場上注意位はしたが。

「にしても、真帆良学園はすごい所っすね。こんな西洋風の街並みがヨーロッパの人でこういう風になったらしいよ」
……観光料とかとれそうっすよ」

「流石に、魔法教会だからそれは無理だろうけどね。一応初代の長がヨーロッパの人でこういう風になったらしいよ」

タカミチの意外な知識に横島はへえ〜と辺りを見る。

既に夕方近く、スーパーや校舎から離れた位置に在るこちら辺には人があまり見受けられない。

タカミチは、先程横島がナンパしているのを見て少し遠回りだが人が少ない方を選んだのだ。

でなければ、日が暮れてしまうと感じたのだらう。

そして、それは結果的に成功だった。

「っあれは!？」

横島はGSだ。

こちらでは、陰陽師を名乗ってはいるが実際使える術は少ない。

しかし、横島はこちらではマジックアイテムそれも高度な物を用いなければ見れない力の流れと言うのが見る事が出来た。

だからだらう。タカミチよりも早くに魔法発動の気配を感じて走り出していた。

後ろからタカミチの声が聞こえるが、横島は更に更に気と靈力を練り上げて速度を上げる。

既に瞬動と変わらぬ速さで疾駆する横島。

目的は今無防備な女の子に放たれた魔法の矢だった。

「やつやっぱりダメ～～～！」

「ナヌウウウー！！」

既にサイキックソーサーを準備していた横島は、目的の急速な方向転換に思わず叫びを上げる。

それでも、彼は経験豊富な戦士だ。

サイキックソーサーを空間に固定すると、それを蹴りつけ三角跳びの要領で少年の前に姿を現す。

そして、霊力を込めた四肢で迫りくる魔法の矢を全て無効化した。

「つどつひえ～～～！ 間に合った～～～」

思わずへたり込んでしまうのは仕方ないだろう。

何せ、それほどまでに先程の急転換はギリギリのタイミングだったのだ。

刹那の判断の間違えさえも後ろの少年に怪我を負わせかねないのだ。

その緊迫した数秒を、その集中力が切れた時の脱力感は相当のモノだ。

ネギと傍らに居た明日菜は、突如現れた横島に困惑し、茶々丸は一瞬戸惑ったが直ぐに飛び去っていた。

横島は良かったと安堵の息をついた。

そして、ネギの方を振り向く。

彼は別にネギの行動に忌避感を覚えた訳ではない。

彼自身、元の世界では悪霊や悪魔、人間と戦ったことがあるのだ。メドゥーサなんて、月での戦闘のときは若返り、モデルとしてテ

レビに出てもおかしくは無かつただろう容姿とスタイルをしていた。それでも、横島がメドゥーサを攻撃いや、殺したのはメドゥーサよりも護りたい対象が居たからだ。

この少年にもそんな対象が居るのだろうと考えていた。

「大丈夫か？」

「っへ？ あっはい。ありがとうございます」

「ったく。気をつけろよ？ んで、なんであの子を狙っていたんだ？」

だからと言って、殺す事を容認しているわけではない。
ただ、横島にとってはそれよりも護りたい人物が居た。
それだけなのだ。

こんなにも幼い子に、その気持ちは知って欲しくない。
だから、その言葉に、ネギと明日菜の二人がビクツと体を震わせた時、横島は、彼らも反省しているのだと、少しうれしく思った。

子供は残酷だ。

平気で生物を解体し、苛め、蹂躪する。

子供は純粹だ。

だから、何か大義名分があれば何でもやってしまう。

昔、子供中心の兵は命令と言うだけで老人を甚振ったとも聞く。
ならば、自分で反省出来る彼らは優しいのだろう。

自分達で考えられるのだろう。

「反省はしているようだな。まあ、良かったじゃないか？ 今回の経験・想いは次同じ事を繰り返さない糧だ。それに、取り返しのつ

かない事態になる事は防げたんだ。まあ、今回の反省は良くするんだな」

それだけ言うと、横島はクシヤリとネギの頭を撫でた。

彼自身沢山の失敗をした。その上で、此処まで成長したのだ。

失敗は確かに悪いことだ。しかし、それを頭ごなしに悪いと決め付け、強制するのは個人を否定することになる。

彼には彼の良さが在るのだ。

それに失敗は成功の母ともいう。

横島自身それは経験から知っていた。

「良いか？ 俺は君達が何であんな行動に移ったのかは知らない。だから、安易に君達を怒る事は出来ない。ただ、言えるのは君はまだ子供だと言う事だ。だから、失敗は必ずする。ただな？ 考えるんだ。行動に移す前に、良く考えてみる。解らなければ周りの大人に聞けばいい。君達で悩んでも良い。ただ、その行動が周りに及ぼす影響と言うのを考えるんだ」

この時、横島の頭には厭味ったらしいロン毛道楽公務員を思い浮かべていた。

と言うのも、これは彼が自分に言ってくれた言葉だからだ。

勿論、言葉にもつと棘が在ったがそれでも彼が大人だと思えた。

それほどまでに、西条の想いが不器用ながらも思いやる気持ちが籠められていたのだ。

「って、初対面なのに何言ってるんだが……すまんかったな坊主」

そう言っただけで照れくさそうに苦笑する。

「そっそんな事ありません！ えっと、大人ってすごいですね……」

僕は自分の事しか考えてなくて……それで……」

「バカ。子供は皆そんなもんだよ。俺のガキの頃なんてもっとヤンチャだったからな」

そう言って、ニツと悪戯小僧の様に笑みを作った。

ネギは、完全に緊張が解れたのか笑顔を返す。

横で見守っていた明日菜も心底安心した様に息を吐いた。

「もう大丈夫そうだな。そんじゃあ、俺も人を待たせてるからもう行くわ。困った事があれば此処に電話して来い。俺も暫くこっちで生活するしな……」

そう言っただけで名刺を渡すと、そんじゃあな。と踵を翻し肩越しに手を振った。

「参ったね。どうやら、思ってた以上に出来た人物みたいだ」

タカミチは、少なからず先程のナンパ好意で減点していた彼の評価を大幅に上昇させていた。

まさか、あそこまで対応できる人物なんてこの学園でも少ないだろう。

最近では先生の中にも問題行動を起こす人もいると言うのに……。

木に凭れ掛かって居たタカミチに横島が近づく。

そこで、彼の思考は打ち切られた。

「御苦労さま」

「いえ、他人の言葉を拝借しただけっすよ」

「いや、そう言えるだけでもすごいんだよ。正直、僕も行くと思っただが……言いたい事を全部言われてしまったからね」

タカミチは嬉しそうに笑った。

「いや、それよりも、怒らなくて良かったっすか？ 初対面の奴に怒られて反発したら厄介っすから注意だけにしましたが……」

「うん。それに状況も良く解らないからね。僕が後から叱っとくよ。流石にこれ以上役目を取られたら僕は仕事が無くなるからね」

タカミチは嬉しそうに笑った。

「お願いします」横島はそう言う二人は再び歩き出す。

色々あったが有意義な時間だったとタカミチは思った。

「あっ！ 因みに、さっきの二人は君がこれから副担任をしてくらうクラスの担任と生徒だから」

「マジっすか!？」

場所は変わって関東魔法教会の長を務める近衛近右衛門の居る真帆良学園女子中等部の学園長室。

横島は一先ず自分に課せられていた任務の一つである親書を手渡ししていた。

「ふむ。確かに受け取った。しかし、まさかこのかの護衛に今話題の横島殿を派遣するとは……婿殿も余裕が出て来たのかのう？」

そうか、横島が護衛を務めなければいけない程の危険がこのかに迫っているのか？　と言外に臭わせる。

横島もその意図に気づいたのか、しかし落ち着いた様子だ。

「俺は長に言われた任務をこなすだけつすよ。それが、将来有望な美少女のためとあれば尚更です。それに今回の件、東西が歩み寄る絶好の機会だと長から言われました。折角の将来有望な生徒達を傷つけないためにも全力を尽くすつもりですよ」

その様子にふむ。と目の前の人物を注意深く見やる。

実は、近右衛門と詠春の二人は秘密回線を持っており、事前に横島の事は聞かされているのだ。

そして、詠春は実力人柄共に申し分なしと太鼓判を押している。

さらに、近右衛門が真帆良で最も信頼する人物の一人タカミチも、安易な判断は避けるべきだが、自分はこの人物に好感が持てると言った。

ならば、近右衛門は信用しよう。と決断する。

「それは頼もしい限りじゃな。身内の恥を晒す様で恥ずかしい限りじゃが、魔法使いの侵入も頼に増えておってな……関西呪術教会に名高い横島殿が来られたのは此方にも僥倖じゃからのぉ」

その言葉に横島は頭を下げる。

近右衛門は、執務机の引き出しから腕章と証明書、カードに契約書を取り出した。

「横島殿は若い。じゃから、中等部エリアに入る時はこの腕章そしてカードを必ず携帯して欲しい。タカミチ君みたいに有名になれば必要無くなるが、でなければ通報されるからのお……後は、既に連絡はしていたが明日から副担任として表の職について貰う。これはその契約書じゃ。このかの護衛の件じゃが、この校舎に居る限りはワシが安全を保障できる。このかの良く通うスーパ―や、住んどる女子寮にもワシの信頼する魔法使いが護ってるからのお……横島殿には基本的にこのかが遠出する時の護衛について貰うつもりじゃ」

それは、学園長が配置している魔法使い達のレベルが決して低いというわけでは無い。しかし、護りながら戦うと言うのは想像以上にキツイ。

だから、彼らは自身が護る場所には様々な仕掛けを施している。彼らも自分の力に自身は在るのだろう。しかし、何人にも囲まれた場合は？ 自分の太刀打ちできない者が来たら？ もしこのかに流れ弾が迫ったら？ そんな“もし”は数え切れない。

そんな理由で、どのような場所でもこのかを確実に護れる人材と言うのが今近右衛門の手元には、タカミチ。ガンドルフィーニ。刀子。神多羅木。明石。シャークティ。式集院位しか居ないのだ。しかし、修学旅行の時はその全員が様々な理由からこのかの傍に居られない。

正直、横島の参入は渡り船で在った。

「おお……忘れる所じゃったわい。横島殿に一人気に掛けて貰いたい人物がおるのじゃよ。勿論、このかとは別じゃがな」

そう言った学園長は引き出しから麻帆良の魔法生徒の情報が纏められた資料を取り出した。

そして、横島に近くに寄る様に言つと、ファイルを開けつり目のサイドポニーの可愛らしい女の子が映った写真付きの資料を横島に渡した。

「その子は、桜咲刹那と言つてな。婿殿からの依頼でこのかを護つてくれておる子じゃ」

「……つまり、この子と協力して護れつてことですか？」

その言葉に学園長は悲しそうに首を横に振つた。

「……その子には、このかの護衛と悟られぬようにして欲しいのじや。彼女は烏族とのハーフでな……忌み嫌われる白い翼をもって生まれてきたのじゃ。君なら解るじやろう？ 彼女の過去が凄惨じゃつたことは……」

差別の歴史は長い。

古代ヨーロッパの或る国では、所謂未熟児や変異を持つ子供を捨てる場所と言う物が在った。

他にも、身分は勿論。出身地、言語、肌色等様々な観点で人は差別する。

日本でも勿論それらは在った。

刹那は、歴史上で照らし合わせると魔女狩りの最盛期に産まれた頃から魔女と宣告されたに等しい環境で育つたのだ。

本来なら赤子の時点で殺されても可笑しくない立場。

烏族も厄災を招く白き翼の子を殺したとなれば、何らかの効果があつただろう。例えば結束力を上げるや、周囲への宣伝等だ。

そして、それらを運よく乗り越えた刹那に次に待っていたのは陰湿ないじめと、明確な敵意。

決して幼い少女に向けて良いものではない。

そんな中で唯一の希望がこのかなのだ。

依存、いや、このかを護衛すると言う任務を心の拠り所にするのも無理は無いかもしれない。

彼女が、それらの経験から自分には要らない子だともし少しでも考えているのなら、多感なこの時期何がマイナスの要素になるかは解らない。

学園長はそれ故に、現状維持を続けて慎重に事を運ぶつもりでいた。

「……わかりました。まあ、刹那ちゃんも美人の期待大な美少女っすからね。言われなくても気にしますよ」

その返答に学園長は満足したのか頷いた。

「長旅に疲れておるじゃろう？ 寮にはタカミチ君に案内してもらいなさい。明日の職員会議でネギ君や他の先生方に紹介する事になるからのお……ふむ。まだ慣れていないじゃろうし、タカミチ君。明日の朝だけ案内を頼む」

「わかりました」

「うむ。それでは、横島君。ようこそ真帆良学園へ……ワシ等は横島君を歓迎しよう」

ネギ・スプリングフィールドは、教職についていようが子供だ。確かに教師と言う重要な職に就いている以上相応の義務と責任がその身に押し掛かるが、果たしてそれはネギ一人に課せられるべきモノなのだろうか？

ネギを教職にした学園長にタカミチ、それに反対しなかった魔法先生、ネギの祖父に、ネギを護らなければいけない状況にしたMMや、このような立場にした両親にも責任が及ぶだろう。

だが、現実ではそうはいかない。

事実、ネギ・スプリングフィールドは今呵責の念に襲われていた。自分は先生に向いていないのではないかと。

その思いは、横島を知ってから余計に強くなっている。

最初は尊敬だけだった。

すごいなあ……。僕もあなれるかなあ。かつこいい。

しかし、時が経つにつれて、それらの想いは後悔と己の不甲斐無さに変わっていく。

止めは明日菜がポツリと呟いた一言だった。

“頼りになるわ”

本人としては、何気なく呟いた一言かもしれない。

だれだってそうだろう。年下よりは年上が頼りに思えるのは。

それに、彼はネギの魔法の射手も消し去り、ネギに対しても大人な対応をしていた。

しかし、ネギにとってはまるで心臓を抉る様な一言だった。

教師としても、魔法使いとしてもその時点でネギは烙印を押されたような気分になった。

まるで地獄に蹴り落とされたような……何処までも堕ちていく感覚。

まだ九つの少年には、その恐怖に立ち向かう気力は無かった。

「ウワアアアアアアンン！！！」

「ちょ！ ネギ！！ これから学校なのよ！？」

明日菜の制止の声すら既には入らなかった。

茫然としている彼女を残して、ネギは一人跨った杖で宙を走っていった。

真帆良学園女子中等部の職員会議は大体八時十分頃から始まる。

真帆良はマンモス校だ。だから、一つの学年にも数人の主任が居る。新田は中でも、問題児の多い3―AとBCDEの計5クラスの主任だ。

その新田のグループだけは何時も八時から職員会議を始めていた。その開始の十分、何をするかと言うとネギ先生の行動、注意点、褒める所、問題点等の主にネギに関する事だ。

九歳と言う子供を教職に就かせる以上、新田達は生徒にもネギにも悪影響が出ないように細心の注意を払わなければいけない。

新田が最近になってAクラスに頻繁に訪れるのもそれが理由だ。教員として生徒の将来を預かる。しかも、中学生と精神や価値観を決める点でまだまだ幼い子供達を広い視野で導く時に、子供が先生になったという矛盾。

お金を貰っている以上、仕事である以上、何より新田の教師としての誇りがそこに妥協は許さなかった。

「それでは、ネギ先生に関して授業は上手くいつている様ですな…少々個人に拘り過ぎている面や、教員として有るまじき言動が在る様だが、そこは私から注意しておこう」

そう言つて、事前に集めた各先生のネギの評価を読む。

やはり子供だから、評価にも甘い面が在るのが見受けられるが、新田自身理解できるのでその事にはとやかく言わない。

それに、授業自体はネギはAクラスしか受け持つてはいない。

知識とは基本的に上から下に流れるモノだ。

いくら教師だからと言つて、九歳の子供に教えられるなどプライドが許すだろうか？ そうでなくても、侮らないだろうか？ モチベーションは下がらないだろうか？ 学園長としてもそこは解つてらしい。

Aクラスは色々常識から外れているし、そこが教師にするうえでの妥協点だった。

「ああ。それと、多忙な高畑先生に変わり、新たに横島先生がこの麻帆良学園に赴任された。横島君自己紹介を」

新田がそう言つと、タカミチの横に座っていた横島がその場に立つ。

因みに、本来ならネギが居るだろう席の横に新たに横島のデスクが置かれている。

「横島忠夫二十歳です。京都で試験的に行われた飛び級制度で教員試験に通りました。担当教科は国語。えっと若輩者ですがよろしくお願いします」

まるでお手本の様なスラスラとした対応だ。

新田も、彼は授業以外はネギ君の補佐として働いてもらつ。と続

けようとして――

「特に！ 美人でお若い女性職員の皆さん！ 僕と一緒に個人レッスンを！ 教師と生徒と言う禁断の関係じゃないですが、教員同士の色々教えあいましょう！」

――ガンと頭を打ち付けた。
そして思ったのは一つ。

あの学園長は厄介事しか持ち込まない。

「横島先生！ 職場恋愛は結構だが、その様なモラルに関わる様な発言を声高らかに宣言するのは止めるんだ！ 生徒達に悪影響を与えたらどうする！！！」

「すっすんませ〜ん！！！！」

彼の情けない姿に、思わず職員室は笑いに包まれた。

勿論、失笑込みで……。

時間は八時二十五分。既に職員会議は終わり、職員の中で担任を
持っている者は既に教室へと足を向けている。

しかし、横島とタカミチはまだ職員室に居た。

何故この二人は教室に行かないのかと言うと、担任であるネギが
居ないからだ。

「一体どうしたんだ？ ネギ君は」

タカミチも流石に心配になってきたのか、両手で煙草の箱を弄りながら時計を眺めている。

横島としても心配なのだろう。明らかに美女と言える教師が居る中で、不安そうに時計を見ている。

「しょうがない。今日は幸い僕が居るし、ネギ君が来るまでの代役を務めようか……」

流石にホームルームの時間に生徒を放置する事も出来ない。

生徒を不安がらせないためにも、ネギ先生は急用が出来た事にしておこう。とタカミチはこれからのスケジュールを組み立てる。

もう急がなくてはいけなйдだろう。タカミチは横島を連れて足早に職員室を後にした。

「それじゃあ、僕が紹介したら入ってきてくれ」

タカミチはそう言って一足先に入っていく。

外に居る横島には声しか伝わらなかつたが、どうやらネギでは無く前任のタカミチが来て驚いているようだ。ネギ君解雇されちゃったの……！！と似たような響きの叫び声が廊下に居る横島も思わず耳を塞ぐ様な声量で響き渡った。

「こっこれが女子中学生パワー……タカミチさん大丈夫か？」

しかし、横島の心配とは裏腹にタカミチは一分も経たずに混乱を鎮めてしまう。

流石本職は違うなど、横島が妙に感心しているが、実際は笑顔で

青筋をたてただけだ。

デスメガネ高畑のデスマイルは効果抜群である。

「ネギ君は、急用が入ったから今日はお休みなんだ。まあ、僕はその代わりと言うわけだね」

「えっと、それじゃあネギ先生は解雇されたんじゃないの？」

「ああ。だから安心すると良い」

クラスの中に安堵のため息が漏れる。

どうやら、ネギは生徒に人気があるらしい。横島は昨日の少年を思い出しながら、生徒たちに慕われているんだな。と感心する。

「ああ、そうだ。今日は君達に紹介したい人が居るんだ。新しく3――Aの副担任になる横島先生だ。横島先生入って下さい」

「あゝ、今日からこのクラスの副担任を任される事になった横島ただブフォオ!!」

なっなんなんだ!？ この戦闘能力は、明らかに中学生じゃない。高校生？ いや、大学生レベルだぞ！ 昨日の明日菜ちゃんさえ、中学生にしたら良く発育した体だったのに……真帆良の中等部は化け物か!!？

「あ……横島君？」

ツッ！ 違う。これはワイをロリにする巧妙な罠！ 屈するわけには……そうだ！ シロだってこれ位の胸だったんだ。ワイが動揺するほどじゃあ……。

「横島君。自己紹介の続きをお願いしたいんだけど」

そうか！ これはワイをロリコンにしようとする宇宙意思の……ック！ 違う！ ワイはロリコンや無いんや……！ ドキドキなんて……教師と生徒の禁断の関係なんて……光源氏計画なんて……後1年の辛抱なんて思っていないんや……！！！！！！」

「横島君？ 少し教職と言うモノについて話す必要が在りそうだ」

「っは！ タカミチさんちっ違う！ これは宇宙意思の巧妙な罠。っていうか、戦闘能力的に中学生じゃないだろ！？ 俺は正常なんだ。そうだ、こんなスタイルの良い中学生が居て堪るか！」

「……ふう。お仕置が必要なようだ」

横島の突然のシャウトに3・Aの面々が停止した中、耐性の在るタカミチだけが動いた。

目標はいまだに叫び続ける横島だ。

彼が暴徒鎮圧用に最もよく使う技。居合拳。圧縮された空氣の塊が横島に襲いかかった。

「ゲフウー！！」

横島が一般人なら全治3カ月は貰うであろうタカミチの攻撃をしかし、横島はタカミチや龍宮、エヴァ位しか解らない程に静かに対処した。

対処自体は簡単だ。居合拳の場所にサイキックソーサーを展開したのみ。

しかし、これには細やかで素早く正確な靈力の運用とタカミチの

居合拳を見切れる動体視力が必要最低限のスキルとして必要だ。

横島は、これを相当の実力者でしか気づかれない程に静かにそして素早くやってのけたのである。

しかし、攻撃を全て防御したにも拘らず横島は演技なのかカンフーアクションの様に、教室から開けっ放しだった扉を通り廊下へと吹き飛ばされた。

それがどれほどの高度な技術かを見破り戦慄している三人を除き、漸く自体が呑みこめたのだろう3-Aの面々が再び動き出す。

「すごい！！」「映画みたい」と言った称賛の声や、「ちょ、人飛んで行ったけど大丈夫なの！？」「救急車！ 救急車！！」と言った心配の声教室内に湧いた。因みに前者が9割強の割合を占める更に言つと、横島が吹き飛んだ事に関しては近くにタカミチが居る事から彼がしたと思われる。

タカミチが暴徒を鎮圧する際、手足を使わずに相手を気絶させるので、その強化版と思つた様だ。

因みに、タカミチはESP同好会から強く教えを請われていた。

「いや、打ち合わせ通り受けましたねタカミチさん」

と吹き飛んでいた横島が何食わぬ顔で教室に現れる。

どうやら、これは事前に二人で仕組んだ小芝居だと言つ事にしたようだ。

生徒達もそうなんだあ。だからあんなに吹き飛んだのに無傷なんだ。と言つた風に納得顔だ。

どうやら赴任早々彼の評価が血に墜ちる事は避ける事が出来たようだ。

「いやあ、俺って関西出身だから関東に行つたらなにか芸でもしなきゃいけないのかと思つてさ」

その横島の言葉に笑い声が生まれた。

既に、ネギの行方が気になるせいか先程までの微かながらしかし根強く残っていたどこか淀んだ空気は、横島の芸のおかげで払拭され、明るい本来の3-Aの光景が戻っていた。

中でも、横島は面白い先生と言う認識が生徒達が詰め寄っている。

タカミチも、元々一限目は横島と生徒の親睦を深めるために利用しようと思っていたのか、特に何か言うつもりは無い様だ。

出席だけは確認しようと思つて教室を見渡して、漸く入った時より感じていた違和感に気づいた。

「このか君。明日菜君は今日はお休みなのかい？」

「ううん。うちもそんな話聞いたらんから、てつきりネギ君の急用に付き合つてると思つてたんやけど」

「……ふむ。実を言うと僕もそこら辺を確認してなくてね……ちょっと学園長に確認を取つてみるよ」

少し、このかも心配そうにしている。

タカミチは、少しでも早く安心させるために携帯を取り出して、その時件の人物が丁度現れた。

「やっぱり……此処に居るはず無いもんね。全くガキのくせして何処に行つたつて……って！ 高畑先生！！」

汗をかき、走つた後の様に息の荒い明日菜だ。

彼女は、教室でタカミチを見つけるとまるで飼い主を見つけた子犬の様に傍に駆け付けた。

「高畑先生！今日は学校にいらしてたんですか！？」

「ああ。今日はたまたま用事が在ってね。それより、ネギ君を知らないかい？」

生徒に余計な混乱を与えないためか、明日菜の近くで囁くように問う。

明日菜は急な接近と声に「えっえ？」と顔を赤らめた。

しかし、彼女もそういう場合では無いと思うっているのだろう。混乱は一時だった。

「えっ？ えゝつと……」

明日菜はタカミチが魔法先生かどうかをまだ知らなかった。

タカミチなら言っても良いかと思うが、ネギの事を考えるとその様に安易に答えが出せない。

明日菜にとってネギ以外の魔法関係者はエヴァ、茶々丸次点で昨日の謎の男だ。

謎の男に関しても、急いでたのか名刺を渡したのはネギだけで、ネギはその名刺の入った財布を持って出ている。因みに本当なら明日菜に渡しただろう横島だが、そこには関西呪術教会 横島 忠夫と言つ裏社会の名刺であり、明日菜が本当に裏の人間かしつかりとした確信が持てなかったために渡してない。

「……どうやら、問題が起こったようだね。横島先生、一限目は先生の親睦を先生の授業は基本的にAクラスだけなので、そのまま二限目に国語の授業をしてください。僕は所要が出来たようだ」

横島の返事を背中に受け、明日菜を廊下に連れ出す。

そして、明日菜から簡単に事情を聴きだすと、安心するように言うてから口止めをして、教室に戻る様に指示する。

明日菜が後ろ髪を引っ張られるようにトボトボと教室に戻ったのを確認したタカミチは学園長に連絡を取った。

残された横島だが、流石に五月蠅くなってきた周りに迷惑を掛けたりいけないと生徒達を席に座らせる。

勿論、朝倉や明石等の胸が大きく積極的な女子に理性が取り払われそうだったからではない。頭の中で、人類にとっては小さいがわいに取っては偉大なる一歩やゝゝ！ とも思ってた無いたら無い。

「そんじゃあ、自己紹介からやり直すか。俺は横島忠夫二十歳だ。担当科目は国語、出身は大阪だが今までは京都の方でお世話になっていた。まあ、こんな所でよろしく頼むな」

横島はそう言って黒板に自分の名前を書き込んでいく。

因みに横島が国語の先生になれたのは、文殊に入れる漢字を増やす為の特訓として新聞の書き写しを行っていたからだ。そのためか、字も美しい。

もし、高校時代の同級生が見たならば偽物だゝ！ と大騒ぎしているだろう。

「後は、君達の知り合いで高校生以上の美人なお姉さまが居る人は紹介してくれ！」

先程よりも気合が入っている言葉に思わずクラスメイトの数名が頭をぶつけた様な音を鳴らした。

殆どは冗談と取ったようだが、何やら視線に悪寒を感じた千鶴や龍宮、楓と言ったナイスバディな人物達は体を震わせた。

「んじゃあ、タカミチさんも言ってたし一限目は質問タイムにしようか……質問のある人!!」

「はい!」

勿論手を上げたのは朝倉だ。

と言うより、他の人物は朝倉がしたい質問を全てするだろうと信じているために手を上げる事は無い。

真帆良のブンは伊達じゃないのだ。

「ん〜。一人だけか……もしかして、わいって人気ないんか?」

だが、昨日今日で横島がそんな事を知っている筈もない。

落ち込んだ横島には、委員長であるあやかが懇切丁寧に教えてくれたために復活は早かったが。

その際、視線が下がっていたのは男の性だろう。

「それじゃあ、横島先生に最初の質問。ずばり! 過去に何人とお付き合いした事がありますか?」

中学生と言えば、やはり恋話だろう。

教室の中でも、ともに付き合っているのが唯の一人だけと言う状況で、その手の話には飢えているのだ。

興味津々と言った雰囲気ですを傾けている。

「ん〜。まあ、一人だな」

「ほうほう。それはどういった人物で？」

「あ……まあ、正直なんで俺なんかには惚れたんだろうって位に良い女だったぞ？ 写真なんか有ればいいんだが……残念ながら持つてなくてな。それに、皆が期待する様な話は出来そうにないから、次の質問に移ってくれていいか？」

表面上特におかしな事は無かった。

横島も苦笑気味に言っているし、朝倉的には捨てられたから余り思い出したいくない話なんだろうと話を切り上げた。

まだ、ルシオラを忘れる事が出来ない横島だが、既に何らかの決着はつけているのだらう。その悲しみは、他人に悟られる様な所には出る事はなかった。

「それじゃあ、——」

こうして横島への質問が続いていく中、タカミチは真帆良学園の敷地内で学園で魔法先生の長距離移動用として貸し出されているバイクを走らせていた。

ヘルメットにはマイクとイヤホンが内蔵されており、そこから学園長との会話を可能にしていた。

「うむ。ネギ君は今そこから西へ五キロほどの森の中に居る様じゃ。何が理由かは解らぬが、消沈してある……出来るだけ急いでくれ」

「解っていますよ」

そうして、更にエンジンの叫び声を大きくした。

既に道路交通法がなんぼのもんじゃない！ 的な速度でアスファルトに黒い轍わだちを刻んでいく。

勿論、学園長が手をまわしていたのか所々に自動車を補導する人が居たので、タカミチはそれこそ何も気にせずにバイクを走らせていた。

「後少しすれば、近くの魔法生徒に張らせた人払いの結界内じゃ。そこからは、瞬動術も許可する」

「はい！」

それを聞いてタカミチも全身の気を高め始めた。

タカミチは一刻も早くネギの下へ行きたいのだ。

何故ネギがこの様な行動を取ったかは知らない。

何故ネギが悩んでいるのかも知らない。

しかし、しかしタカミチはネギを一人にしたくは無いのだ。

孤独は辛い。戦争孤児であるタカミチはその事を良く知っていた。突然崩れた日常。明日どこか刹那の未来さえも生きてるか解らないような場所で、生きて来たタカミチだからこそ、紅き翼で、真帆良で、悠久の翼での日常の人の温もりの心地よさを知っていた。

だから、今まで寂しい思いをしてきただろうネギにこれ以上一人にさせたくない。

これはタカミチのお節介と思われるかもしれないが、止める事の出来ないネギへの思いやりの心だった。

3-1A（後書き）

時間軸が原作とは乖離しています。

はい。ただ、タカミチとネギの対談がしたかっただけです。忘れていたなんて事ではありません。横島登場したばかりでどうやって絡ませるんだとか迷ったわけでも在りません。ネギとタカミチを対談させたかっただけです……！！

後、やっぱりキャラの口調が難しいですね。なにか参考に成り易い二次創作があれば教えて下さい。

特に明日菜、このか、刹那と教師陣ですかね……。

後、このような稚拙な作品を見て貰い有難うございます。

因みに、ネギと楓のシーンは削除しますが、楓にはネギ側について貰う予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3345u/>

英雄の息子と魔神殺しの英雄と

2011年7月6日14時43分発行